



学位論文題目 Title	中国語における「空間動詞」の文法化研究：日本語と英語との関連で(A Study of Grammaticalization of Spatial Verbs in Mandarin Chinese: In relation to Japanese and English)
氏名 Author	盧, 涛
専攻分野 Degree	博士 (学術)
学位授与の日付 Date of Degree	1996-03-31
資源タイプ Resource Type	Thesis or Dissertation / 学位論文
報告番号 Report Number	甲1472
権利 Rights	
JaLCDOI	10.11501/3116820
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/D1001472

※当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

氏名・（本籍） 盧 濤 （中華人民共和国）

博士の専攻分野の名称 博士（学術）

学位記番号 博い第248号

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

学位授与の日付 平成8年3月31日

学位論文題目 中国語における「空間動詞」の文法化研究
—日本語と英語との関連で—

審査委員 主査 教授 西 光 義 弘

教授 眞 方 忠 道 教授 山 田 敬 三

論文内容の要旨

本論文は日本語や英語と関連付け、待たせ懐柔の言語に見られる連動文を視野に入れ、中国語の空間動詞の文法化を分析したものである。文法化（grammaticalization）とは語彙項目が文法形式に変化するプロセスを指す。著者のいう「空間動詞」とは存在の場所と動作の方向に関連している動詞の総称である。文法化の研究は特に過去5年の間に急速に発達してきた分野で、本論文は文法化理論の方法論を中国語に適用した画期的な研究である。

第1章「機能主義のアプローチ」では言語研究をHOWとWHYの問題とみなし、形式主義と対立する機能主義の問題解決が有効であるとする。我が国では機能主義アプローチが十分に行われていないことに鑑み、筆者のこの立場は貴重であるし、また斬新である。

第2章「文法化理論について」は理論的枠組みとなる文法化理論を概観する。フンボルト、サピア、メイエの研究を概観し、最近の研究の先駆となった70年代のギボンの研究および80年代後半から現在にいたるホッパー、トローゴット、バイビーならびにハイネの研究を検討し、その妥当性を裏付ける。穏当な理論構築である。

第3章では文法化の可能な方向を探るために中国語の類型的特徴が5つ特定されている。すなわち1) 孤立言語、2) VOとOVの混在型言語、3) 主題卓越言語、4) 類像性言語、5) 文法化言語である。その上で中国語の具体的な例に基づき、文法化の出力（output）としての文法形式を、範疇化（機能語化）と形態化（接辞化）の2つの側面から捉え、ケーススタディの方針を定める。

第4章から第8章まではケーススタディにあてられている。第4章は存在動詞「在」、第5章は方向動詞「向」、第6章は直示的移動動詞「去」、第7章はGIVE動詞「給」、第8章は通過動詞「通過」と「経過」の文法化を分析する。いずれの場合も文法化の入力となる述語動詞としての用法を詳細に調査し、意味的抽象性と関係性という点で文法化の素質を備えていることを実証する。そして文法化した現象を細かく観察し、述語動詞との関連性を考察する。これらのケーススタディの特徴は堅実なデータ観察を通じ、一般化を引き出している点がまずあげられる。そして観察は中国語に留まらず、日本語および英語にもおよび、更に世界中の言語に見られる連動文のデータをも視野に入れ、中国語

の占める位置を明らかにしようとした点は特筆すべきである。

第9章は結論である。文法化研究の中心的推進者であるホッパーの提示した5つの原則に則して本研究の調査結果をまとめる。また一般的に受け入れられている一方向性 (unidirectionality) 仮説は必ずしも一般原則として成立しないことを従来の研究と本研究を照らしあわせることによって示している。最後に今後の研究課題を指摘して終えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は中国語の空間動詞の文法化を分析したものである。文法化 (grammaticalization) とは語彙項目が文法形式に変化するプロセスを指す。著者のいう「空間動詞」とは存在の場所と動作の方向に関連している動詞の総称である。文法化の研究は特に過去5年の間に急速に発達してきた分野で、本論文は文法化理論の方法論を中国語に適用した画期的な研究である。

第1章「機能主義のアプローチ」では言語研究をHOWとWHYの問題とみなし、形式主義と対立する機能主義の問題解決が有効であるとする。我が国では機能主義アプローチが十分に行われていないことに鑑み、筆者のこの立場は貴重であるし、また斬新である。

第2章「文法化理論について」は理論的枠組みとなる文法化理論を概観する。フンボルト、サピア、メイエの研究を概観し、最近の研究の先駆となった70年代のギボンの研究および80年代後半から現在にいたるホッパー、トローゴット、バイビーならびにハイネの研究を検討し、その妥当性を裏付ける。穏当な理論構築である。

第3章では文法化の可能な方向を探るために中国語の類型的特徴が5つ特定されている。すなわち1) 孤立言語、2) VOとOVの混在型言語、3) 主題卓越言語、4) 類像性言語、5) 文法化言語である。その上で中国語の具体的な例に基づき、文法化の出力 (output) としての文法形式を、範疇化 (機能語化) と形態化 (接辞化) の2つの側面から捉え、ケーススタディの方針を定める。

第4章から第8章まではケーススタディにあてられている。第4章は存在動詞「在」、第5章は方向動詞「向」、第6章は直示的移動動詞「去」、第7章はGIVE動詞「給」、第8章は通過動詞「通過」と「経過」の文法化を分析する。いずれの場合も文法化の入力となる述語動詞としての用法を詳細に調査し、意味的抽象性と関係性という点で文法化の素質を備えていることを実証する。そして文法化した現象を細かく観察し、述語動詞との関連性を考察する。これらのケーススタディの特徴は堅実なデータ観察を通じ、一般化を引き出している点がまずあげられる。そして観察は中国語に留まらず、日本語および英語にもおよび、更に世界中の言語に見られる連動文のデータをも視野に入れ、中国語の占める位置を明らかにしようとした点は特筆すべきである。

第9章は結論である。文法化研究の中心的推進者であるホッパーの提示した5つの原則に則して本研究の調査結果をまとめる。また一般的に受け入れられている一方向性 (unidirectionality) 仮説は必ずしも一般原則として成立しないことを従来の研究と本研究を照らしあわせることによって示している。最後に今後の研究課題を指摘して終えている。本研究は全体としてバランスがよくとれており、経験的データ観察と並んで重要な理論的枠組みについても、最新の文法化理論を自家籠中のものとして使いこなし、しかも重要な修正をも提案している。このことは一般理論への重要な貢献として迎えられることであろう。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は、論文提出者盧濤が博士 (学術) の学位を授与されるにたる資格を有するものと判定した。